

教化センター通信 ダルマアピール

発行
真宗大谷派三條教区
教化センター
三條市本町2-1-57

「目連尊者とホリエモン」

二十二組 長徳寺 関根正隆

教化センターに参加して一年、里村先生からは、これまで法話や講義ではあまり聞くことがなかった話を聞かせてもらっている。

その一つが神通力。お盆の時期になると、その由来として語られる目連尊者だが、地獄に堕ちた母を見つけた神通力については、超能力は真宗には馴染まないと言話の際にも避けてきた。

しかし、この認識は誤りだと教えられた。漢字で書くと『神通』、神の力のようなだが、サンスクリット語で書くと『智慧』に対して、智慧に触れた人がもつ『更なる』智慧』という意味だという。

昔の日本でも当時の一般常識を超えた治水の知識をもって行動し、洪水を治めた人を「神通力がある」と讃えたそつだ。

イチローが連続二百本安打を毎年

能力の持ち主であろう。昔ならこのような力も神通力と呼んだのかもしいない。

智慧第一の舍利弗が、問えば何でも答えるといわれるほど理解が深かったのに対し、説法を邪魔する者を神通力で退かせたという神通第一の目連は、何を聞いても答えなかったそつだ。そのかわりに、行動や立ち振る舞いを見るだけで、聞かなくても仏教の教えが解るような、説明を超えた存在だったという。

私は以前の仕事の関係で政治資金パーティーに何度か足を運んだことがあり、その縁で少なからず政治・政局に興味がある。

この目連尊者の神通力の話聞いて数年前の小泉劇場と言われた時代のことがふと頭に浮かんだ。小泉首相の構造改革を知識で支えたのは経済学者から大臣になった竹中平蔵さん。竹中さんの知識は深く弁舌巧みだが、日本がどう変わるのか言葉では具体的には分かりづらかった。これに対して小泉路線を地で行った人が「ホリエモン」である。時代の寵児といわれ企業を次々に買収、テレビ局や球団まで金の力で手に入れよ

うとしたホリエモン。たとえ竹中さんの説明が分からなくても、ホリエモンの行動が日本はこう変わる、変わってしまつのかと感じさせた。

初期教団にとって目連尊者はホリエモンのような存在であったのかと私は想像した。語らなくてもその立ち振る舞いだけで仏教を語れた目連尊者と小泉改革の旗印として国政選挙にも立ったホリエモン。二人の生き方、思考は全く異質であるが、行動で表現するという共通点は、目に見えない真理や思想を大衆に強く訴える力があつたと思う。

寺の行事に来られる方から参加の理由を「親が毎日正信偈を読んでいて」「祖母がお寺参りをする人だった」という話をよく聞く。これは親が子に仏法を語り聞かせたというより親の姿勢が仏法を語っていたのかも知れない。これも神通力だろうか。二児の父として背筋が伸びた。

「お陰様の表と裏」

二十三組 北条 崇雄

寺の住職である家の父は葬儀の法話では縁についての話をする事が殆どである。その話のなかで最近必ずと言っていいほど出てくるのが「順縁」「逆縁」という言葉である。話によれば、良し悪し関係無く自分の想定内で起こる縁が「順縁」であり、自分の想定の外で起こる悪いことが「逆縁」であるという。物が「順縁」であるうちはその縁を受け入れることができるが、「逆縁」になると受け入れることはできなくなるという。本来はそのどちらも受け入れていくことが至上であるが、人はどうしても「逆縁」を受け入れることはできず、そこで弥陀の本願がその「逆縁」をともに受け止めてくださるということらしい。最近このことについて、自分は考えを巡らせることがある。

これらは因縁の話である。因縁というものをあらわす言葉として、自分は「お陰様」という言葉を実際に使うことが多い。誰かのおかげで今の自分があるという言葉である。お陰様とは所謂他力を認める言葉であり、自分一人の力で今の自分になれ



たのではないと自覚する言葉である。すばらしい言葉だ。今の自分は自分一人の力によるものではなく、多くの人々の支えによってあるものなのだ。そしてだからこそ、支えてくれた人々を大事にし、また自身もその支える側に立とうという意識が生まれる。この言葉にはそんな生き方の教えが込められていると言えるだろう。だがこの言葉は、先述した「順縁」と「逆縁」を含む言葉でもあるのだ。

ではまず「順縁」「逆縁」とはどういったものか。これは実際には複数の意味合いをもって使用される言葉であり、場合によってここで語る意味と異なる場合があるということ、をまず念頭においていただきたい。

因縁というのは都合のよいものだけとは限らない。中には自分にむしろ害悪となる因縁もある。都合のよいものが「順縁」で悪いものが「逆縁」と考えれば分かりやすいのだが、実はそう単純な話でもない。普段の生活のなかでは不都合となることは必ず起きるものであり、すべてのものがうまく作用する人間などない。生きる以上は誰もがそういつた不都合を受け入れていかねばならないのだ。そういったものが全て受け入れられない「逆縁」と言うわけではなく、むしろ「順縁」の範疇に入る因縁もあるらしい。こういう言葉なら分かりやすいだろう。

「あの時は辛かったが、今思えばその辛さは今の自分の力になっている。」
「逆縁」の場合の例としては「あれさえなければ今こんなことにはならなかった。」つまり、どんな性質の因縁であれ、今の自分を形づくるものであるという点が重要なのだ。そしてそれによって形づくられる自分によって、因縁が「順縁」であるか「逆縁」であるかが変わってくる。自分が順調であるうち、辛くともなんとかできると思っているうちは、どのようなことでも、それまでの因縁に感謝し、受け入れることもできる。だが、それはものが自分の想像の範囲内で収まっているためであり、悪いことが起きても、その事態を想定している自分がどこかにいるためである。その事態が自分の能力を超えたものであったとしても、自分の想定がそれに追いついていないため、冷静に受け入れることができず、冷たい追いつかなくとも、自分や自分に属する周囲の能力が追いついていない場合も同じである。だが、この二つを超える事態に直面すると「逆縁」という因縁が生じる。こうなると本当にどうしていいのかわからなくなる。これまでの経験や知識といったものが意味をなさないのである。それを受けとめるには、それに追いつくための自分にはない新たな何かをとり入れる必要がある。そして自分にはないものである以上、自分

以外の何かから頂く必要がある。つまり、まるところそれが他力というものであり、弥陀の本願ということなるだろう。
お陰様という言葉もそうである。いまの自分に満足していれば自分を形づくった周囲の環境、人物への感謝となり、不満があれば憎しみとなる。「お陰様で自分はこんなに幸せです。」「お陰様で自分はこんなに不幸だ。」どちらも因縁というもの存在を認める言葉であり、表れている面が異なる表と裏である。しかしその表と裏も、もう少し踏み込んで考えることができる。感謝は大切だ。忘れてはならない。だからこそ自分の力になつてくれた人々を大事にできる。しかしそれらを大事にするあまり、新しい何かをとり入れることを阻害してしまうことがあれば、自分が力になれる誰かを無視してしまふ結果になりかねない。それは順縁を受け入れ逆縁を受け入れぬことであり、それは逆縁のなかにいる人すらも拒むことも起こりうるのだ。憎しみを他者に撒き散らすことは逆縁のために順縁を受け入れぬことと同様であり、自分の力になつてくれる誰かを傷つける結果を招いてしまう。どちらも相互に作用するものであり、片方だけに与られると、もう片方が見えなくなり、知らずにその全体像を覆い隠してしまうのだ。お陰様の表と裏というのはそこにあ

る。自分の周囲に感謝するのが表であるなら、その感謝すべきものの立場に自分も身を置こうという言葉に見えない裏と言える部分も含めて、お陰様という言葉があるのだろう。
今の自分は残念ながらこの言葉を表でしか発することができない。誰かに感謝することはできても、自身が他の誰かに感謝される立場になるということが想像できない。しかし、それは誰かを知らないうちに傷つける結果となつているかも知れない。だがそれに対し、自分が何をすればいいのかわからない。もし変わりたいと願うなら、自分も何か新しいものを受け入れなければならぬだろう。そしておそらくそれには、自力以上の何かが必要だ。

